

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

平成	15	年	4	月	2	日
----	----	---	---	---	---	---

試験研究機関名	農業技術研究所	氏名	渡辺秀樹
---------	---------	----	------

種別	1	1.口頭 2.誌上
----	---	-----------

題名 (原著)	ミニバラの根腐症状から分離された <i>Phytophthora</i> 属菌	
------------	---	--

発表者名 (原著)	渡辺秀樹・景山幸二・植松清次・百町満朗・田口義広 (岐阜農技研・岐阜大流域研セ・千葉農総研・岐阜大農・岐阜専技)	
--------------	---	--

口頭	発表会名 (場所)	平成15年度日本植物病理学会 大会(東京都)					
	主催機関	日本植物病理学会					
	発表月日	西暦	2003	年	3	月	30

誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	—	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						

(要旨) 2002年3月, 岐阜県内の施設栽培のミニバラで, 生育が劣り下葉が黄化する症状が多発した。被害株の根は黒褐色水浸状に腐敗しており, 罹病組織から1種類の *Phytophthora* 属菌が高率に分離され, 接種により病徴が再現された。分離菌株の遊走子のうは, 乳頭突起を有し, 主に卵形, やや変形するものも認められた。大きさの平均は31×23mm, L/B値は1.3で非脱落性であった。単一培養で有性器官を形成し, 蔵卵器は表面平滑, 大きさは平均29mmで, 基部がやや漏斗状を呈するものも認められた。蔵精器は主に蔵卵器基部に側着し, 卵胞子は平均26mmであった。菌糸生育は10~30 で認められ, 最適温度は25 前後であった。これらの特徴は, 既報のバラ疫病菌 *P. megasperma* とは明らかに異なり, *P. citricola* 等と類似性が高かった。そこで本菌株を含む54種の *Phytophthora* 属菌について, rDNA-ITS領域の塩基配列から系統樹を作成したところ, 本菌株は *P. citricola* 等を含むクレードに分類されたが, これらとは独立した位置にあった。種の同定には, 今後さらに検討を要すると考えられた。

(キーワード) ミニバラ、疫病、*Phytophthora* 属菌

分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他
制度	4	1. 場費、2. フォウエイ外研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他
審査	0	1. 有り、0. 無し

注) 学術論文: 学術出版物(ジャーナル、ブローチングを含む)に掲載された査読付きの学術論文。  
 学術図書: 学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
 講演・報告: 査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	4	月	10	日
試験研究機関名	農業技術研究所	氏名	棚橋寿彦					

種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	被覆尿素を用いた水稻育苗箱施肥における苗白化症の発生原因													
発表者名 (原著)	棚橋寿彦・本田宗央*・高橋幸蔵**・矢野秀治 ( *現生物産業技術研究所・**現岐阜地域農業改良普及センター )													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	日本土壤肥料学雑誌												
	巻号等	Vol.	74	No.	2	p.	219	~ p.	222	西暦	2003	年	4	月
	出版または発行元	日本土壤肥料学会												
	分類 <sup>(注)</sup>	1	1. 学術論文			2. 学術図書			3. 講演・報告					
(要旨) 被覆尿素を用いた水稻育苗箱施肥において発生する第2葉の白化は尿素肥料中に混在するピウレットにより発生する。播種後3日間、すなわち緑化期以前のピウレットとの接触が原因となる時期である。この症状はピウレットと種子の接触を避け播種するか、あるいは、出芽期中の育苗箱への多量灌水により軽減が可能である。														
(キーワード) 水稻、被覆尿素、育苗箱施肥、ピウレット、白化														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	4	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	1	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。  
 学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
 講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	4	月	15	日					
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	松村博行								
種別	1	1. 口頭、2. 誌上											
題名 (原著)	カキの葉の黄化に関する研究												
発表者名 (原著)	松村博行・新川猛・出町誠*・石川嘉奈子** (*普及企画室・**揖斐農業改良普及センター)												
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度春季大会											
	主催機関	園芸学会											
	発表月日	西暦	2003	年	4	月	4	日					
誌上	誌名	園芸学会雑誌											
	巻号等	Vol.	72	No.	別1	p.	209	~ p.	西暦	2003	年	4	月
	出版または発行元	園芸学会											
	分類 <sup>(注)</sup>	4	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他							
(要旨) カキのコンテナ栽培で、春季にIB化成肥料を40g/コンテナ施用すると、灌水によって硫酸加里が溶出して、根を肥料焼けして、葉が黄化する。葉の黄化によって光合成できず2~3年で枯死する。症状が認められたら直ちに灌水を大量に行って、硫酸加里成分を洗い、種粕を施用すると、数日で回復する。													
(キーワード) カキ、IB化成、コンテナ栽培、黄化、水洗													
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他											
制度	5	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他											
審査	0	1. 有り、0. 無し											

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	4	月	15	日	
試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	尾関健			
種別	3 1.口頭、2.誌上 3.ポスター								
題名 (原著)	カキ'陽豊'の高接ぎ更新における中間台木の影響								
発表者名 (原著)	尾関健・新川猛・松村博行・西垣孝* (*岐阜農業改良普及センター)								
ホ ス タ	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度春季大会							
	主催機関	園芸学会							
	発表月日	西暦	2003	年	4	月	4~5	日	
誌上	誌名	園芸学会雑誌							
	巻号等	Vol.	72	No.	別1	p.	72	~ p.	西暦 2003 年 4 月
	出版または発行元	園芸学会							
	分類 <sup>(注)</sup>	4	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他			
(要 旨) カキ'陽豊'を高接ぎするとその果実品質は中間台木品種の影響を受ける。'西村早生'の場合は'伊豆'、'刀根早生'及び'三里御所'中間台木より大果で収量が多く、果色が赤い。糖度は三里御所'中間台木がほかの中間台木より高かった。 従って、現地では'西村早生'の遠地が多いのでこれを中間台木しとて高接ぎ高接ぎ更新を行えば高品質'陽豊'果実生産が可能である。									
(キーワード) カキ、中間台木、西村早生、大果、多収									
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他							
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他							
審査	0	1. 有り、0. 無し							

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

【様式は決して変更しないで下さい。数字は半角でお願いします】

## 研究発表報告

Ver.2003.04

所 長	副所長	管理課長	企画課長	技術総括	広報担当

下記の通り発表しましたので報告します。

科学技術振興センター所長 様	平成	15	年	4	月	15	日
(場・所名) 農業技術研究所	(氏名) 今井田一夫						

種 別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題 名 (原著)	養液循環式Ebb & Flowでのリン施与濃度の違いがミニバラ鉢物の生育及びリン吸収に及ぼす影響													
発表者名 (原著)	今井田一夫 <sup>1,2</sup> ・中村雅亘 <sup>3</sup> ・高橋明子 <sup>3</sup> ・鈴木亮 <sup>3</sup> ・福井博一 <sup>2,3</sup> ( <sup>1</sup> 岐阜農技研, <sup>2</sup> 岐阜大院連合農学研究科, <sup>3</sup> 岐阜大農学部)													
口頭	発表会名 (場所)	日本大学生物資源学部湘南校舎												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2003	年	4	月	4	日						
誌上	誌 名													
	巻 号 等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分 類		1. 学術誌、 2. 学会プロシエディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要 旨)														
循環式Ebb&Flowでのミニバラ鉢物生産における施肥管理技術確立のために、リン施与濃度区を3区を設け、リン施与濃度の違いが植物体の生育及びリン吸収に及ぼす影響について検討した。植物体の生長量は地上部はリン施与濃度が高くなるにしたがい大きくなったが、地下部は逆の傾向を示した。植物体内のリン含量は、リン施与濃度が高くなるにしたがい高くなり、植物体内の窒素量は施与窒素濃度が同じであるにも関わらずリン施与濃度が高くなるにしたがい高くなった。土壌吸着リン量は、リン施与濃度が高くなるにしたがい高くなったが、土壌吸着窒素量及び土壌養液内窒素量は、施与窒素濃度が同じであるにも関わらずリン施与濃度が低くなるにしたがい高くなった。以上のことから、リン濃度の違いは窒素吸収に影響していると推定された。														
(キーワード)														
養液循環, Ebb&Flow, リン濃度														
分 野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制 度	1	1. 場費、2. プロシエ外研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審 査	0	1. 有り、0. 無し												

【様式は決して変更しないで下さい。数字は半角でお願いします】

## 研究発表報告

Ver.2000.04

所 長	副所長	管理課長	企画課長	技術総括	広報担当

下記の通り発表しましたので報告します。

科学技術振興センター所長 様	平成	15	年	4	月	15	日
(場・所名) 農業技術研究所	(氏名) 荒井 輝博						

種 別	1	1. 口頭、2. 誌上																	
題 名 (原著)	夜間照明における照度と光質がダイズの生育に及ぼす影響																		
発表者名 (原著)	萩野智崇 <sup>1)</sup> 、荒井輝博 <sup>2)*</sup> 、大場伸哉 <sup>1)</sup> 、吉田一昭 <sup>2)</sup> 、河合靖司 <sup>3)</sup> 、岡田隆史 <sup>4)</sup> 、山崎敬亮 <sup>5)</sup> 、石井征亞 <sup>1)</sup> 、堀内孝次 <sup>1)</sup> 1)岐大農, 2)岐阜農技研, 3)岐阜県庁, 4)西濃農改セ, 5)岐大連農 *発表者																		
口頭	発表会名 (場所)	第215回 日本作物学会 講演会 (千葉大学西千葉キャンパス)																	
	主催機関	日本作物学会																	
	発表月日	西暦	2003	年	4	月	5	日											
誌上	誌 名																		
	巻 号 等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月					
	出版または発行元																		
	分 類		1. 学術誌、 2. 学会プロシーディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他																
<p>(要 旨) ダイズ品種フクユタカの圃場における夜間照明による成熟遅延の被害が報告されている。そこで夜間照明の照度と光質がダイズの生育に及ぼす影響について検討した。現地圃場における調査では、夜間照明の照度が強くなるほどフクユタカの成熟遅延が大きくなった。また今回用いた夜間照明(高圧ナトリウムランプ)の場合、照度が約0.4lxより強くなるとフクユタカへの成熟遅延の影響が現れた。赤色光を除いた蛍光灯(緑色蛍光灯)と白色蛍光灯を夜間照明としてフクユタカを栽培したところ、赤色光を除いた蛍光灯は、白色蛍光灯よりも成熟遅延の程度が緩和される傾向を示した。このことから、フクユタカの成熟遅延は夜間照明に含まれる赤色光が暗期の効果を打ち消しているために起こったと推察され、赤色光を減らした夜間照明を用いることにより成熟遅延の影響を緩和できると考えられる。</p>																			
<p>(キーワード) 光質、照度、成熟、赤色光、ダイズ、フクユタカ、夜間照明</p>																			
分 野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他																	
制 度	5	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他																	
審 査	0	1. 有り、0. 無し																	

【様式は決して変更しないで下さい。数字は半角でお願いします】

科学技術振興センター所長 様

(試験研究機関)長

## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	05	月	26	日
試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		平 正博								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上														
題名 (原著)	有機栽培ナスにおける土着天敵の害虫抑制状況															
発表者名 (原著)	平 正博・峯村 晃															
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会第85回大会(和歌山)														
	主催機関	関西病虫害研究会														
	発表月日	西暦	2003	年	05	月	23	日								
誌上	誌名	関西病虫害研究会報														
	巻号等	Vol.	45	No.		p.	67	~ p.	68	西暦	2003	年	5	月		
	出版または発行元	関西病虫害研究会														
	分類 <sup>(注)</sup>	1	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 3. その他									
(要旨)																
<p>有機栽培や無農薬栽培に対する関心が高まってきているがその栽培技術は必ずしも標準的技術として確立しているとは言えない。そこで、雨除けハウスで有機質肥料を用いた無農薬栽培(有機区)と化学肥料と化学農薬を用いた栽培(慣行区)のナスにおける害虫及びその天敵の発生状況を調査して、土着天敵による害虫の抑制力とキーベストについて検討した。その結果、ネット被覆した雨除けハウスにおけるナスの有機栽培ではホコリダニ類がキーベストで、それ以外の害虫は慣行区に比べて土着天敵の発生が多いため無農薬でも被害が少なく<sup>4)</sup>、多発生が予想される場合には天敵の放飼で補完することにより被害回避が可能と考えられた。</p>																
(キーワード) 有機栽培、ナス、害虫、土着天敵																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	1	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文: 学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書: 学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告: 査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

科学技術振興センター所長 様

農業技術研究所長

## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	5	月	26	日
試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		天野昭子								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上														
題名 (原著)	市販の残留農薬検査キット(エンバイロガード)の利用について															
発表者名 (原著)	天野昭子・小林忠彦															
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会大会(和歌山市)														
	主催機関	関西病虫害研究会														
	発表月日	西暦	2003	年	5	月	23	日								
誌上	誌名	関西病虫害研究会報 第45号														
	巻号等	Vol.		No.	45	p.	107	~ p.	108	西暦	2003	年	5	月		
	出版または発行元	関西病虫害研究会														
	分類 <sup>(注)</sup>	1	1. 学術論文				2. 学術図書				3. その他					
<p>(要旨) 農産物の残留農薬検査方法の一つとして、市販の残留農薬検査キットの実用性について検討した。対象とした検査キットは、SDI社の「エンバイロガード・プレート型・ダイジノ剤用」で、供試作物にはイチゴ、トマト、ナス、ピーマン、ダイコン、ニンジン、ハクサイ、カキ及びナシを用いた。薬剤無添加試料による反応を見たところ、ピーマン、ニンジン、ナシで作物体の成分に何らかの反応妨害物質が含まれると推測された。また、添加回収試験の結果、イチゴ、ピーマン、ニンジン、及びナシの回収率が悪く、抽出方法等に検討が必要と考えられた。</p>																
(キーワード) イムノアッセイ、エンバイロガード、農薬残留、ダイアジノン																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	4	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	1	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシエディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。



科学技術振興センター所長 様

農業技術研究所長

## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	5	月	26	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	矢野秀治									
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	黄色土ダイコン畑における土壌流亡と対策													
発表者名 (原著)	矢野秀治・浅野雄二・小林忠彦													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	岐阜県農業技術研究所研究報告												
	巻号等	Vol.		No.	3	p.	26	~ p.	33	西暦	2003	年	3	月
	出版または発行元	岐阜県農業技術研究所												
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 3. その他								
<p>(要旨) 高鷲村の黄色土ダイコン畑からの土壌流亡による河川の水質汚濁が懸念されたため、その実態と対策について検討した。その結果、ダイコン作付け期間中の土壌流出量は10t/10aに達し、その90%以上が収穫後の裸地状態の時期に流出していた。畦間にライ麦を播種することで、土壌流出量は慣行栽培に対して83~96%減少した。また、対策の実施により、窒素、リン酸の流出も軽減できると考えられた。</p>														
(キーワード) ダイコン畑、黄色土、土壌流亡、ライ麦														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシエディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	5	月	26	日						
試験研究機関名	農業技術研究所		氏名	宇次原清尚										
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	トルコギキョウ新品種「トゥインクル」の育成													
発表者名 (原著)	宇次原清尚・加藤克彦・小枝 剛・三輪俊貴													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	岐阜県農業技術研究所研究報告												
	巻号等	Vol.		No.	3	p.	1	~ p.	8	西暦	2003	年	3	月
	出版または発行元	岐阜県農業技術研究所												
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文			2. 学術図書			3. その他					
<p>(要 旨) 1992~1998年に極小輪、極早生の雑種第1代7品種と固定種1品種を育成した。「トゥインクルスノー」は花色が純白、花底が緑である。「トゥインクルホワイト」は花色が白、花底が赤黒である。「トゥインクルパープル」は花色がパープル、花底が赤黒である。「トゥインクルピンク」は花色がピンク、花底が赤黒である。「トゥインクルスカイ」は花色がかすりの紫である。「トゥインクルチェリー」は花色がかすりのピンクである。「トゥインクルマリン」は花色がバイカラーの紫である。「トゥインクルピーチ」は花色がバイカラーのピンクである。</p>														
(キーワード) トルコギキョウ、育種、新品種、F1、極小輪														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシエディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	5	月	26	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	山本好文									
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	水稻高品質・良食味生産のための収穫時期の許容範囲に関する研究													
発表者名 (原著)	山本好文・野口裕史													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	岐阜県農業技術研究所研究報告												
	巻号等	Vol.		No.	3	p.	18	~ p.	25	西暦	2003	年	3	月
	出版または発行元	岐阜県農業技術研究所												
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 3. その他								
<p>(要旨) 「出穂日からの積算温度」を水稻の成熟期を示す指標とすると「おおむね780日度」が成熟期であった。収穫早限界は700日度、収穫遅限界は「コシヒカリ」が1000日度、「ハツシモ」が850日度であった。</p>														
(キーワード) ハツシモ、コシヒカリ、出穂日からの積算温度、成熟期														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

科学技術振興センター所長 様

農業技術研究所長

## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	5	月	26	日
試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		越川兼行								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上														
題名 (原著)	イチゴの底面給水による雨よけ高設ベンチ育苗「ノンシャワー育苗」の開発															
発表者名 (原著)	越川兼行・天野昭子・長谷部健一・安田雅晴・下畑次夫															
口頭	発表会名 (場所)															
	主催機関															
	発表月日	西暦		年		月		日								
誌上	誌名	岐阜県農業技術研究所研究報告														
	巻号等	Vol.		No.	3	p.	9	~ p.	17	西暦	2003	年	3	月		
	出版または発行元	岐阜県農業技術研究所														
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文					2. 学術図書					3. その他			
<p>(要旨) イチゴの作型には、「ポット育苗による促成栽培」がある。ポット育苗は土壌伝染性病害を回避するためと花芽分化促進技術として広くおこなわれている。さらに、病害回避と作業姿勢の改善のため、雨よけ高設ベンチ育苗が普及している。しかし、灌水を植物体の上部から灌水しているために炭疽病が散見される。そこで、親株の生育を良好にする栽培槽と底面給水育苗ベンチを開発し、花芽分化促進のため8月中旬に窒素中断が容易にでき、炭疽病を回避できる育苗方法を確立した。</p>																
<p>(キーワード) イチゴ、雨よけ高設ベンチ育苗、栽培槽、底面給水育苗ベンチ、花芽分化促進、炭疽病回避</p>																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	0	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシエディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	5	月	26	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	天野昭子									
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	水田除草剤の水田内挙動と流出抑制について													
発表者名 (原著)	天野昭子・小林忠彦													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	岐阜県農業技術研究所研究報告												
	巻号等	Vol.		No.	3	p.	34	~ p.	39	西暦	2003	年	3	月
	出版または発行元	岐阜県農業技術研究所												
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文			2. 学術図書		3. その他						
<p>(要旨) 水田除草剤のフホソカブとメネットについて、水田内での挙動を調査すると共に、流出抑制のため水管理について検討した。土壌への吸着と水深の間には相関が見られ、フホソカブは水深0.8cmのとき投入量の約90%が吸着したが、3.2cmでは60%未満となった。メネットでは水深が深くなるほど土壌吸着量は減少したものの、フホソカブほど顕著ではなく、水深3.2cmにおいても添加量の95%以上が土壌へ吸着した。フホソカブ及びメネットの流出軽減対策として、薬剤が土壌に吸着しやすいよう極端な深水管理は避け、散布後少なくとも4日間は田面水を動かさず、また田面水中の薬剤量が低くなるまでの14日から20日間は水田の止水を徹底させることが、効果及び環境負荷軽減の両面から見て最も有効な対策と考えられた。</p>														
(キーワード) フホソカブ、メネット、水深、吸着、水田														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	4	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシエディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	7	月	3	日						
試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	松村博行								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	日本のフルーツの未来													
発表者名 (原著)	松村博行													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	月刊ぎふ咲さくら楽NET												
	巻号等	Vol.	3	No.	28	p.	12	~ p.	13	西暦	2003	年	6	月
	出版または発行元	KKアドキットインフォケーション 058-233-5613												
	分類 <sup>(注)</sup>	4	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
<p>(要旨) 昔の果物は固く、甘みが少なかったが今はみずみずしく甘いものが多い。これからもおいしさは追求される。ただし、ロボットによる収穫・選果によって安く供給することが未来に求められている。日本には先進国のなかでは果物の摂取が少ない。旬の果物をいっぱい食べて健康な生活をしましょう。</p>														
(キーワード) 果物、未来、ロボット収穫														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	5	1. 場費、2. フォンデーション研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、フロンティア等)に掲載された査読付きの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

### 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

										平成	15	年	7	月	23	日
試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		堀之内 勇人								
種別	1	1. 口頭、2. 誌上														
題名 (原著)	植物生育促進菌類 <i>Fusarium equiseti</i> と生分解性ポットを利用した土耕栽培での トマト根腐萎凋病の防除 - 生分解性ポットの使用時期 -															
発表者名 (原著)	堀之内勇人 <sup>1</sup> ・勝山直樹 <sup>1</sup> ・百町満朗 <sup>2</sup> ( <sup>1</sup> 岐阜県農業技術研究所、 <sup>2</sup> 岐阜大学農学部)															
口頭	発表会名 (場所)	日本土壌微生物学会2003年度大会(福岡県福岡市)														
	主催機関	日本土壌微生物学会														
	発表月日	西暦	2003	年	7	月	12	日								
誌上	誌名															
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月		
	出版または発行元															
	分類 <sup>(注)</sup>	＝	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 4. その他									
<p>(要旨)</p> <p>土耕栽培のトマト根腐萎凋病に対して植物生育促進菌類 <i>Fusarium equiseti</i> と生分解性ポットを組み合わせたときの防除効果を調べた。2002年の試験では定植149日後に発病を調査した結果、防除価は87、2003年の試験では定植135日後に発病を調査結果、防除価は81と高かった。これらのことから、生分解性ポットを定植時に使用することで、<i>F. equiseti</i> との組み合わせ処理の効果が安定して高くなることが明らかになった。また、試験2で根圏土壤中とトマト根における <i>F. equiseti</i> と病原菌の菌量を継時的に調査した結果、生分解性ポットを使用することで、<i>F. equiseti</i> の定着促進効果と病原菌の感染阻害効果が認められた。</p>																
<p>(キーワード)</p> <p><i>Fusarium equiseti</i>、生分解性ポット、土耕栽培、トマト根腐萎凋病、防除</p>																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	2	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	0	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	8	月	26	日
試験研究機関名	農業技術研究所					氏名	棚橋寿彦									
種別	1	1. 口頭、2. 誌上														
題名 (原著)	堆肥中アンモニア態窒素の定量法について - 塩化カリウム溶液では抽出されないアンモニア態窒素の存在 -															
発表者名 (原著)	棚橋寿彦・矢野秀治															
口頭	発表会名 (場所)	日本土壌肥料学会2003年度神奈川大会														
	主催機関	日本土壌肥料学会														
	発表月日	西暦	2003	年	8	月	21	日								
誌上	誌名	日本土壌肥料学会講演要旨集														
	巻号等	Vol.	49	No.		p.	141	~ p.		西暦	2003	年	8	月		
	出版または発行元	日本土壌肥料学会														
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文					2. 学術図書					3. その他			
<p>(要旨)</p> <p>堆肥中にはリン酸マグネシウムアンモニウム(MAP)が存在しており、常法の無機態窒素抽出法である2M-塩化カリウム溶液による振とう抽出では、溶液がアルカリ性となるため抽出されない。従って、これらを定量するためには、酸性溶媒による抽出やEDTA等のマグネシウムとキレートを生成する溶媒による抽出が適当である。</p>																
(キーワード) 堆肥、アンモニア態窒素、MAP、抽出法																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	4	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	0	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆も含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。



## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

平成	15	年	8	月	25	日
----	----	---	---	---	----	---

試験研究機関名	農業技術研究所	氏 名	矢野秀治
---------	---------	-----	------

種 別	1	1. 口頭、2. 誌上					
題 名 (原著)	家庭生ごみの堆肥化に関する研究(その2)						
発表者名 (原著)	矢野秀治・伊藤 元*・佐藤 仁** (*畜産研究所、**(株)岐阜アグリナス株式会社)						
口頭	発表会名 (場所)	日本土壤肥料学会2003年度神奈川大会 (明治大学)					
	主催機関	日本土壤肥料学会					
	発表月日	西暦 2003 年 8 月 20 日					
誌上	誌 名	日本土壤肥料学会講演要旨集					
	巻 号 等	Vol. 49 No. p. 157 ~ p. 西暦 2003 年 8 月					
	出版または発行元	日本土壤肥料学会					
	分 類 <sup>(注)</sup>	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 30%; padding: 2px;">3</td> <td style="padding: 2px;">1. 学術論文</td> <td style="padding: 2px;">2. 学術図書</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">=</td> <td style="padding: 2px;">3. 講演・報告</td> <td style="padding: 2px;">3. その他</td> </tr> </table>	3	1. 学術論文	2. 学術図書	=	3. 講演・報告
3	1. 学術論文	2. 学術図書					
=	3. 講演・報告	3. その他					
(要 旨) 家庭生ごみに対して人工ゼオライト(鉄型)の添加が発酵に及ぼす影響について検討した。 その結果、人工ゼオライト区は堆積後4~5週目で70以上の連続発熱が得られるとともに、無添加区に比べてBOD・粗脂肪が減少し、硝酸生成も3週間早まった。また、コマツナのポット試験・発芽試験とも無添加区より優る傾向が認められ、人工ゼオライトが生ごみの発酵促進に有効であると考えられた。 また、戻し堆肥を利用した家庭生ごみ堆肥は、高温発酵期間終了時(6週後)でコマツナ生育・収量の安定とともに根伸長への影響が少なくなり、この時点(BOD:30mg/g程度)で農業利用が可能と考えられた。							
(キーワード) 家庭生ごみ、人工ゼオライト、BOD、堆肥化							
分 野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他					
制 度	5	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他					
審 査	0	1. 有り、0. 無し					

(注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。  
 学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆も含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
 講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

### 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	8	月	25	日
試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		松尾尚典								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上														
題名 (原著)	イチゴにおけるバンカープラントを利用したワタアブラムシの防除															
発表者名 (原著)	松尾尚典															
口頭	発表会名 (場所)															
	主催機関															
	発表月日	西暦		年		月		日								
誌上	誌名	農耕と園芸														
	巻号等	Vol.	58	No.	9	p.	45	~ p.	47	西暦	2003	年	9	月		
	出版または発行元	誠文堂新光社														
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 4. その他									
<p>(要旨)</p> <p>イチゴでのアブラムシの天敵であるコレマンアブラバチについて、ムギクビレアブラムシをつけたコムギをバンカープラントとして利用してコレマンアブラバチの処理回数の削減と簡易安定技術について検討した。この結果、コレマンアブラバチを安定的に低コストで利用することが可能であることが示唆された。</p>																
<p>(キーワード)</p> <p>バンカープラント、コレマンアブラバチ、アブラムシ</p>																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	5	1. 場費、2. フォンデーション研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	0	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

### 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	9	月	5	日
試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		松村博行								
種別	1 1. 口頭、2. 誌上															
題名 (原著)	カキの葉の黄化に関する研究(第3報)K <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> とKClによる再現比較															
発表者名 (原著)	松村博行・新川猛・出町誠*・石川嘉奈子** (*普及企画室・**西濃地域揖斐農業改良普及センター)															
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部平成15年度研究発表会 (名古屋大学大学院生命農学研究科)														
	主催機関	園芸学会東海支部														
	発表月日	西暦	2003	年	8	月	29	日								
誌上	誌名															
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月		
	出版または発行元															
	分類 <sup>(注)</sup>	====	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他								
<p>(要旨)</p> <p>カキのコンテナ栽培で、春季にIB化成肥料を40g/コンテナ施用すると、灌水によって硫酸加里が溶出して、根が肥料焼けして、葉が黄化する。葉の黄化をK<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>とKClによって再現させて、その状態を比較すると、KClによる再現は黄化が急激で激しく、落葉する。K<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>による再現ではIB化成肥料による黄化によく似た症状であった。</p>																
<p>(キーワード) カキ、IB化成、コンテナ栽培、黄化、K<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>とKClによる再現</p>																
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他														
制度	5	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他														
審査	0	1. 有り、0. 無し														

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

						平成	15	年	9	月	5	日
試験研究機関名	農業技術研究所					氏名	新川 猛					

種別	1	1. 口頭、2. 誌上											
題名 (原著)	カキ '太秋' 花粉の非還元化と育種への利用												
発表者名 (原著)	新川 猛												
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部 (名古屋大学大学院生命農学研究科)											
	主催機関	園芸学会東海支部											
	発表月日	西暦	2003	年	8	月	29	日					
誌上	誌名												
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年	月
	出版または発行元												
	分類 <sup>(注)</sup>	==	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他					
(要旨)													
「おいしい種なしカキがほしい」という消費者ニーズに対応するため、倍数体育種を行い、9倍体の無核のカキを育種する。倍数体育種のためには、非還元型花粉が必要であるが、自然界ではほとんど存在しない。そこで、カキの花粉親として最も有望と思われる「太秋」を用いて、低温処理による非還元型配偶子を人為的に誘導することを検討した。またその非還元型配偶子を選別後、溶液受粉を行い得られた未熟胚を培養した。今後、培養により得られた植物体について、核DNA量を測定し、その倍数性を確認し、選抜淘汰することによって、9倍体の完全甘ガキ個体を育成する。													
(キーワード)													
完全甘ガキ・非還元化配偶子・倍数性変異・無核化													
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他											
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他											
審査	0	1. 有り、0. 無し											

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	9	月	22	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	安田雅晴									
種別	3	1. 口頭、2. 誌上 3. ポスター												
題名 (原著)	NaClを添加した培養液がイチゴの生育に及ぼす影響(第1報)													
発表者名 (原著)	安田雅晴・越川兼行(農業技術研究所)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度秋季研究発表会 (山口大学農学部)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2003	年	9	月	21	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	==	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他								
(要旨) 培養液のNa濃度がme/l以下でイチゴの高設ベンチ栽培部長岐卓方式が可能で、NaClを添加して高糖度のイチゴ生産の可能性を得た。														
(キーワード) イチゴ、高設ベンチ栽培、NaCl、高糖度														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	9	月	22	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	松村博行									
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキの葉の黄化に関する研究(第2報)K <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> による再現													
発表者名 (原著)	松村博行・新川猛・出町誠*・石川嘉奈子** (*普及企画室・**西濃地域揖斐農業改良普及センター)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度秋季研究発表会 (山口大学農学部)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2003	年	9	月	20	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	==	1. 学術論文			2. 学術図書			3. 講演・報告				4. その他	
(要旨)														
カキのコンテナ栽培で、春季にIB化成肥料を40g/コンテナ 施用すると、灌水によって硫酸加里が溶出して、根が肥料焼けして、葉が黄化する。葉の黄化をK <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> によって再現させると、春季にIB化成肥料を40g/コンテナ 施用することによる黄化によく似た症状であった。														
(キーワード) カキ、IB化成、コンテナ栽培、黄化、K <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> による再現														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	5	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	9	月	22	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	尾関健									
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	<sup>15</sup> Nトレーサー法によるカキ'富有'樹の施肥時期別の窒素の吸収移行													
発表者名 (原著)	尾関健・梅宮善章*・西垣孝** (農業技術研究所・*独立行政法人果樹研究所・**岐阜地域揖斐農業改良普及センター)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度秋季研究発表会 (山口大学農学部)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2003	年	9	月	20	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	====	1. 学術論文			2. 学術図書			3. 講演・報告				4. その他	
(要旨) 施肥時期を異にするポット栽培のカキ'富有'樹の窒素の吸収移行を <sup>15</sup> Nトレーサー法により解明した。 カキの生育期前半に施肥し吸収された窒素は新生組織へ移行する割合が高く、7月移行に施用された窒素は貯蔵養分として利用される。養分転換期が窒素転流の変換期と思われ、5~6月吸収窒素は果実肥大に關与する。														
(キーワード) カキ、 <sup>15</sup> Nトレーサー法、施肥時期、窒素の吸収移行														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	9	月	22	日			
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	安田雅晴						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上									
題名 (原著)	NaClを添加した培養液がイチゴの生長に及ぼす影響										
発表者名 (原著)	安田雅晴、越川兼行 ( : 発表者)										
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度秋季大会研究発表 (山口大学)									
	主催機関	園芸学会									
	発表月日	西暦	2003	年	9	月	21	日			
誌上	誌名	園芸学会雑誌 大72巻 別冊2									
	巻号等	Vol.	72	No.	2	p.	159	~ p.	西暦	年	月
	出版または発行元	園芸学会									
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他					
(要旨) イチゴ「濃姫」の「岐阜県方式」高設栽培において、NaClを添加した培養液が生長に及ぼす影響を検討した。培養液にNa2me/l相当量、及びNa4me/l相当量のNaClを添加して栽培した結果、イチゴの生育・総可販収量ともNaClを添加しない培養液と大差なかったが、3L・2L収量がやや少なく、大玉率がやや低下した。一方、NaCl添加により3月以降の果実糖度がやや高まった。Na濃度が4me/l以下であれば、収量を減らすことなくイチゴ栽培が可能であり、またNaClを更に添加することで、果実を高糖度化できる可能性も示唆された。											
(キーワード) イチゴ、NaCl											
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他									
制度	1	1. 場費、2. フォンデーション研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他									
審査	0	1. 有り、0. 無し									

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシエディングも含む)に掲載された査読<sup>つき</sup>の学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆も含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。



**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	9	月	22	日	
試験研究機関名		農業技術研究所						氏名		越川兼行							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上															
題名 (原著)	イチゴ高設ベンチ栽培における培養液閉鎖システムに関する研究(第1報)																
発表者名 (原著)	越川兼行・安田雅晴(農業技術研究所)																
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成15年度秋季研究発表会 (山口大学農学部)															
	主催機関	園芸学会															
	発表月日	西暦	2003	年	9	月	20	日									
誌上	誌名																
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月			
	出版または発行元																
	分類 <sup>(注)</sup>	==	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告				4. その他		
<p>(要旨) イチゴ高設ベンチ栽培における培養液閉鎖システムを開発し、時期養分吸収特性に合わせた循環させる培養液組成を検討し、掛け流し方式と同等の収量・品質を得ることを確認した。</p>																	
<p>(キーワード) イチゴ、高設ベンチ栽培、循環方式</p>																	
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他															
制度	1	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他															
審査	0	1. 有り、0. 無し															

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

**研究発表報告**

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

		平成	15	年	9	月	18	日						
試験研究機関名	農業技術研究所			氏名	矢野秀治									
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)														
発表者名 (原著)														
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	土壌改良と資材 (改訂第2版)												
	巻号等	Vol.		No.		p.	159	~ p.	172	西暦	2003	年	8	月
	出版または発行元	(財) 日本土壌協会												
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他								
<p>(要 旨)</p> <p>第2部 土壌改良に使われる主な資材の特徴と問題点</p> <p>7 パーミキュライト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・原料・性能及び機能</li> <li>・効果及び安全性</li> <li>・使用法と使用上の問題点</li> </ul> <p>8 パーライト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・原料・性能及び機能</li> <li>・効果及び安全性</li> <li>・使用法と使用上の問題点</li> </ul>														
<p>(キーワード)</p> <p>パーミキュライト、パーライト</p>														
分野	5	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他												
制度	5	1. 場費、2. プロジェクト研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他												
審査	0	1. 有り、0. 無し												

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、プロシーディングも含む)に掲載された査読つきの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆も含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。

科学技術振興センター所長 様

農業技術研究所長

## 研究発表報告

下記のとおり発表しましたので報告します。

Ver.2001.04

										平成	15	年	10	月	1	日	
試験研究機関名	農業技術研究所					氏名	松村博行										
種別	2	1. 口頭、2. 誌上															
題名 (原著)	農業ふしぎ探検「カキの渋のひみつ」																
発表者名 (原著)	松村博行																
口頭	発表会名 (場所)																
	主催機関																
	発表月日	西暦		年		月		日									
誌上	誌名	月刊ちゃぐりん															
	巻号等	Vol.	40	No.	11	p.	124	~ p.	129	西暦	2003	年	10	月			
	出版または発行元	社団法人 家の光協会 03-3266-9003															
	分類 <sup>(注)</sup>	4	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他									
(要 旨) まんがの監修。																	
(キーワード) カキ、渋																	
分野	8	1. 生活・福祉、2. 環境・安全、3. 健康・保健衛生、4. 工業技術 5. 農業技術、6. 畜産・水産技術、7. 林業技術、8. その他															
制度	5	1. 場費、2. フォンテ外研究、3. 産学共同、4. 国補、5. その他															
審査	0	1. 有り、0. 無し															

注) 学術論文：学術出版物(ジャーナル、フロンティア等)に掲載された査読付きの学術論文。

学術図書：学術に関する著書(共著、分担執筆を含む)。学術雑誌等への投稿や原稿依頼による執筆は含まない。  
講演・報告：査読されない講演や学会等の発表、セミナー等への講演。また、査読のない学術雑誌等への投稿や依頼原稿及び大学の紀要はここに含む。